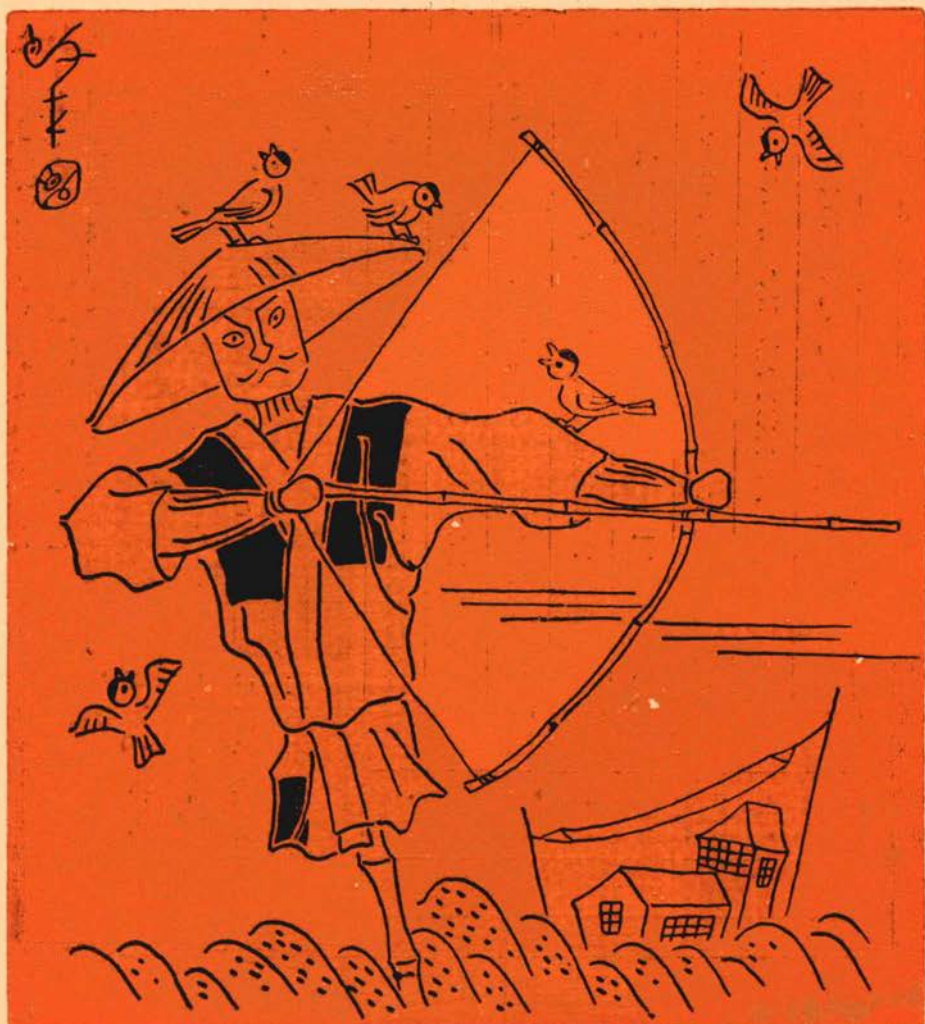


川柳雜誌

第二十號

大正十三年三月三日第三號
大正十四年十一月一日發售
每月一回
每冊一角

川柳雜誌 第二卷 第十二號



武笠山椒氏著

最新刊

俳風柳亭通釋

絶大好评二編出づ

川柳は我が文藝上に一異彩を放つ所の警句文學である。僅々十七文字の中にあらゆる社會相を活躍させて辛辣骨を刺すの概がある人生の側面は人生の裏面は否その焦點を諦視した人生はまさしくとその十七文字の上に展開してゐる。然るに川柳の精華たる柳樽は徳川期の社會相を端的にその對象としてゐるが爲めに語意に於て内容に於て吾々の理解を妨げる所が尠くない。川柳の研究が兎角に斷片的であり勝ちなのも、一つは斯うした事情に餘儀なくされた結果であらう。著者はその至大の蘊蓄を傾倒して柳樽初篇及び二篇の句をそれ／＼各一卷に収めて平押しに全釋した。幾多の挿畫を入れて徳川の世相をも示した。斯くて吾々の川柳は今やほんとに吾々のものとなつたのである。

東京市神田區錦町一丁目

有朋堂書店

振替東京一七四八番

第二編 各全一冊

四六判總クロース順美裝

正價各金 參圓

送料各金 拾錢

川柳雜誌 第二卷 第十二號 (大正十四年十二月一日發行) 目次

近作

麻生路郎(七)

東魚氏の柳樽通釋異見の異見

木村半文錢(二五)

玩具箱

蛭子省(二七)

曼戀慕悲話二題

吉田きよし(二八)

十一月例会

橋本二柳子記(九)

畫の句會

塚崎松郎記(三)

近作柳樽

麻生路郎選(三)

川柳書架 (十三)

(三〇)

募集句肌小屋

吉本寛汀選(三〇)
塚崎松郎
橋本二柳子共選(三)

川柳と生活

安川久流美(三)

各地柳壇

松郎編(三)

川柳家戸籍調

(三) 新戎橋より

方よし生(五)

川柳塔

(二六)

馬行、啞人、双柳、万よし、莢豆、かほる、柳骨、柳路、雅幽、松郎、二柳子
落伍者(表紙繪) 吉岡 烏平 編輯後記

句作上の常套語

路郎記(三)
麻生路郎(六)



近作柳樽

路郎選

11

駄目押した所へ當てた聴診器
或時は脇によりめく藥瓶
寢轉んで被雇度も虫がよし
要領を得てそれでよしそれでよし
夢ぞ知りつゝも明日明後日
引つ掛けた帶明日もする帶
あくびと共に思ひ出すこゝ
信用があり世話ばかりさせられる
節穴に覗けるだけは青さなり
傘さして蒸氣ポンプを聞いてゐる
一目見てまあゝこんな物だらう
氣嫌よくいちまの襟を合せて居
子と親もやはり首まで湯につかり
三人が三人横になる思案

神同同同同同同同同同同同同東
戸 京

随同同同同同同同同同同同 つけ
帖

一幕目毎に隣りへ隣子を借り奉公の身分忘れた怒りやうな夜になつた街を日歸り見て急ぎ場を取つてくれてる友のすばしさ時計ある爲に長尻して仕舞ひ沖はもう帆前を隠す波になり惡童のやうに逃けてる稻雀崖の人小さく立つてよく目立ちこゝらから土産物屋が無く旅館まつたくの所世間が悪いのだんまりで居れば鮮人らしくなく約束の時間をこゝで飲んでゐるなつてない姿で仲居拭き掃除病床へ瘦せましたなご後は出す

同同同同堺同同同同同同同同同同

同同同同佳同同同同同同同同同同同
鳴

大 同 同 同 同 螢 同 同 同 同 大 同 同 同 同 神 同 同 同 同 西 同 同 同 同
阪 池 阪 戸 灘
靜 同 同 同 同 屏 同 同 同 同 乾 同 同 同 同 一 同 同 同 同 虛 同 同 同 同
雲 三 呂 坤 狂 空 藏

同同神同同同同同同同同同同同同大同同姬同同東同同同
戸阪島京

同同一閑子同同聞同同小路同同助同同飯同同眠同同四五六同同塊
路路六山聲佛

句作上の常套語 (六)

麻生路郎



(10) 「て」で止めた句

『て』で止めた句は柳樹の中にもかなりある。こゝはあるが多くは平凡であつて、武王川の中にある『て』止めの句に比べて見劣りのする句が多い。

『て』止めのいゝこゝろは句意に餘情あらしめることであるが、一步あやまればいや味となり平凡となる。

——昔の句——

心中の身の狐火をこはがりて

(評)近松の心中ものを思はせられる句である。死に行く身にさへ狐火を怖はる女氣がよく出である。この句の『て』止めは此の句をして餘情あらしめてある點で充分成功してある。

跨かねばならぬ所にうらみ寢て

(評)男と女、それはいつの世にも心のもつれを生じ易い。男の薄情さを憤る女心の巧みに描かれてあるではないか。

異見狀ちひりく金も來て

(評)人情の機微を穿つた句。人間愛のにじみ出た嬉しい句である

側に毒があるこは醫者も言ひかねて

(評)これも穿ちの句である。それ、其處に座つてござる美しいのが、おからだの毒である。こは流石に醫者も云ひかねたのであるが「言ひかれる」言はず「言ひかれて」こ「て」止めとして更に餘情を深からしめたのである。

世の中は親金にしばられて

(評)若い間は親、一人前になつてからは金に束縛されるのが世の常である。金といふ奴、うなるほど有つてさへ人間の自由を縛る實に厄介千萬なものである。

面白く酔ふ女房に子がなくて

(評)實に輕妙ではないか。「面白く酔ふ女房」さは、云はでもそれ者の果であることを思はせられるであらう。好いた女房と差し向ひ何不自由のない暮らしても、時には子のない事から、お互ひに氣まづい思ひをするこゝもあるのである。この句は其處へ觸れたのである。

——今の句——

初旅の身に菜の花が眼に泌みて
この儼に十四の娘が易に出て

吐露樓
眠聲

好き嫌ひ解らぬ頃を口説かれて、算盤は戀から醒めた音を立て逢ひたさを三疊の間に締め切つて子供ただ數さへあればうなづいて同情をします愚婦の癖にして父の顔汚さぬ子に子を育て流行らない柄を無口の姉は着て領事館仲よくしたい旗を立て泣きじやゝりする時咽喉が涼しく貧しさにだんく仲がよくなつて旅の話は手拭をしほらせて

(11) 「けり」で止めた句

武玉川の中に「二十五は娘の年でなかりけり」といふ句がある。従来川柳といふものは俗語の多くで出来あがつてゐて、此の句のやうに文章體の句はまことに寥々たるものであるが巧に使ひこなせば、これ又一つの好叙法たるを失はない。

「けり」は「也」と同じく軽い斷定であり、一句を引きしめ、句に餘情あらしめるなき實に意義のある用語なのである。

「けり」や「かな」は必ずしも俳句の專賣ではない。川柳は川柳として「けり」も使へば「かな」も使ふ。

が併し「けり」や「かな」を川柳の上に生かして使ふことは

馬行 同 同 松 同 一 徹 蔭 柊 路 同
郎 郎 豆 閑 底 穂 果 郎

生やさしいことではないから初心の間は眞似て見たところで大した收穫もあるまい。ただ斯うした叙法もあるこいふことを知つておくだけで充分であらう。

昔の句

女房の云つた師走になりにけり

(評)この句を読むと、女房の「それ見たことか」といふ顔が先づ目の前に浮んで来る「まあ矢笠しく云ふな。亭主は亭主だけの考へがある」と云つたその御亭主の困まり抜いた顔が續いて浮かんて来る。冬の準備をした蟻の話が浮かんて来る。

去り狀で元の從弟になりにけり

(評)簡單な一句、しかも事件の複雑さを巧みに表はしてゐるではないか。松郎に「諦めて元の次男さなりにけり」といふ句があるが武玉川に既に同巧異曲のこの句のあることを知つて古人の決して凡ならざる着眼に敬服せざるを得ない。

去る時に唇に沙汰もせざりけり

(評)結婚のための吉日を撰むさいふことは仲々容易ならぬ問題であるが、さて離婚するさなるさ、四の五の云つて居ない。唇、そんなものはそこにあるかとも云はないのが人情だ。何んでもないことを提へて斯うした一句にまさめてゆく古人の手腕には感嘆の外ない。

投げられて鉄刀の心かはりけり

(評)感能の鋭敏な句である。私は斯んな巧みな句が古句にあることを嬉れしく思ふ。斯うした句に於て「けり」が實に寸隙なきまでに適切であることを思はなければならぬ。私はよく昔の句の例句として武玉川の句を引例するが武玉川の中には實に巧みな句がある。この句もその一つである。機會があれば一讀されたいと思ふ。武玉川の古書はたやすく手に入るまいから有朋堂文庫の中にある川柳狂詩集を求められるのが一番よからうと思ふ。

日の科のやうに二十日を阿りけり

(評)「十二月人をこかに日を敷へ」といふ句もある。二十九日の次ぎはみそかであるべきことは當然であることを思はず人間といふものはその日が勝手に早く來たやうに感じて、三十日といふ日を叱つたといふのである。

暮の文あはれなりける次第なり

(評)遊女からの文である。何處も同じ秋の夕ぐれで年の瀬を越すためには苦界にあるものなくてはならぬのが金である。それをどのパトロンへ持つて行つてもこれ又梨のつぶての返事だにないといふ無心狀の反響のないのかくは詠じたのである。穿ち得て妙といふべき句である。

金箱の方へ頓死も倒れけり

(評)痛烈な皮肉、人間を罵倒した句である。

隠す事もなくて女房の老ひにけり

(評)長い人生を一ささめにしてびゆつと見せてくれる巧みに驚く。

長昔諸釘の名迄も覺けけり

(評)ゆつたりした句である。舊家らしさまで出てゐる。斯うした表現に於ても「けり」は生きて働いて居る。

▲安川久流美氏より(金澤)

久しぶりで貴下への筆を執ります。「新聞記者」である私は毎日のニュースに眼を通じているんなことを考へられます。

第一私の痛々しく思ふのは「圓盤投げ」や「投げ槍」に可憐人間の生れもつかぬキズなうけることです。特に教育界へ注意して欲へいこまでありますまいか?

×

「新聞記者」といふ日々の鏡が私の天命とし

×

深刻な川柳も悉く、斯うしたところから自然に生れ出づるものと斷定してゐます(十月二十三日夕)(路郎宛)

— 今 の 句 —

八

人知れず覗く寫眞ミなりけり
教科書に悖る世間ミわかりけり
衝動もなく新年ミなりけり
傘が倒れて早や終點へ着きにけり
瓦から瓦へ水の流れけり
肉體のきこにも若さ輝けり
ビルディング蠅迷ひけり迷ひけり
嬉れしさの三町程も續きけり
笛ばかり吹く巡查ミはなりにけり
殺すこにきめて其の夜は寝たりけり
「けり」は古句にも現代の句にも實、寥々たるものであること
は前述の通りであるがこゝに示したやうない、句のあることを
忘れてはならない。(つゞく)

蘆穂 徹底郎 同 水府 十字路 東魚 文久 馬行 松郎 路郎

て私は向後なにも、乎に盡くしたいと思ひます。

私の樂しかつた、夢の如な時代は過ぎましたとして私は飽くまでも第三者の立場に、總てを支配しやうと思ひます。

×

深刻な川柳も悉く、斯うしたところから自然に生れ出づるものと斷定してゐます(十月二十三日夕)(路郎宛)

本社十一月例會

十一月一日夜
於端之坊

燈下親しむ十一月の夜例會を端之坊に於て催しました。出席者は左の諸氏で中々盛會でした。(一柳子)

路郎、紋太、憲翠、万よし、文錢、一路、彦三郎、獨眼坊、飯山、放馬、蒼馬、靜雲、助六、太平樂、塊佛、雄峰、正坊、龍堂、柳蛙、戲多通、珀朗、柳水、突支坊、かほる、波郎、閑堂、山月、乾坤、百雷、三次、祇梵、三平、文久、子行、鷹歩、しげる、のぼる、刀三、廣賀、馬行、松郎、ひろし、革郎、長人、二柳子(名簿より)

行商(兼題) 路郎 選

飯屋から出て行商の聲になり かほる
行商の留守へ男の子が生れ 眠 聲
行商のそこでも賣つたに云ひ 廣 賀
行商のひみじ見惚れる秋の空 馬 行
行商は百里も歩く姿なり 長 人
行商の帯にキラ／＼金鎖のほる
富山から紺の香りで簀戸を開け 子 行
行商の西へ西へ消れてゆき 波 郎
行商に出たまゝ兄は死にました 三 平
お隣へ来た行商へ門を締め 戲多通

暇をひに來て行商は一つ賣り
腹の子の名前を決めて富山を出
行商の書問見た娘が目に残り
同 柳 水

(人)行商の今日は京都の雨と濡
靜 雲

(地)行商のいゝ眺め、背負ひ變へ
しける

(天)今日に賣る氣で宿を立ち
のぼる

(軸)行商の兄に一本つけて待ち
路郎 選

炭斗を提げて力を褒めてやり
山月

炭斗に母の氣嫌は盛つて來る
文久

挟めない炭炭斗に残つて來る
祇梵

炭斗へ舅は細い手を伸し
刀三

寒さは寒し炭斗の新らしさ
路郎

炭斗へ女中吸殻取つて行き
正坊

胡座から胡座炭斗宙をゆき
馬行

炭斗へついでに消炭四つ五つ
しける

炭斗へ女房氣の急ぐ音を立て
萬よし

炭斗を片手に足袋の裏をみせ
助六

炭ついでからは炭斗邪魔になり
かほる

すき焼にころあいの炭見つからず
炭斗に瘦せた女房の顔の色
同 塊佛
炭斗に火鉢の間にちこほれ
同 飯山
炭斗へ亭主四五本抜いて來る
同 柳水
炭斗を置いて女房の初對面
同
炭斗も一ぱいにして里歸り
同
炭斗に火鉢へ言つて聞かすやう
同 松郎
炭斗へ意見は挟み損ねたり
同
炭斗を引よせ女將氣嫌よし
同 紋太

(軸)炭斗にこの頃置たい、女中
松郎 選
舞妓等に云ひ伏せられても紳士
文久
不見轉へ紳士ばかりでまこま
刀三
乗客は紳士の方へ肩を持ち
柳水
老紳士あんまり若い氣で暮らし
のぼる
満員に紳士の靴の哀れなり
塊佛
さし出した帽子を紳士輕うこり
ひろし
紳士こして見へぬ木綿を着流
文錢
二三人寄る紳士もよく喋り
かほる
交番で俺を紳士にしてしまひ
乾坤
別宅の方へ紳士は届けさせ
路郎
さこ迄も紳士の面らで太い奴
戲多通
實際は飲みに行きたい紳士なり
波郎

賣れたので古着屋に出して吊り
いゝ柄も古着屋だけに氣がひゝ
古着屋へ付合ふ方が値切り役
一度着たきりゝ古着屋まけぬ也
恰好のやつ古着屋で見つけて來
古着屋へ逡巡はついでらく寄り
今氣附くゝに古着屋キヅを聞き
古着屋は胸算用につきまゝひ
古着屋の暇算盤に脇をつき
古着屋のまた水を撒け水を撒け
古着屋に魔窟のやうな道が出來
古着屋は警察へ行く羽織を着
うっかりこ出た古着屋へ撒水車
夕焼けてゐる古着屋へ二三入
すき髪で來て古着屋の柄を撰り
古着屋の埃りが目立つ朝こなり
鞍替に古着素氣なう値かきまり
古着屋は風にまかしてちらつゝ
振袖も昔めいたる古着店
古着屋の仲人程の世辭も云ひ
古着屋の松竹梅の裾模様
古着屋のきやうさん賣門見
古着屋の客の羽織は地にすれて
古着屋へ姑の意地少し見ぬ
同 太平樂
同 龍堂
同 しけら
同 子行
同 助六
同 飯山
同 馬行
同 塊佛
同 文久
同

斷然こ古着屋たゝみかけるなり
 刀三
 よく賣ち日の古着屋は氣が強い
 同
 古着屋の又奥様を嘆かせる
 同
 古着屋の懸値が通る面白さ
 同
 ひま入れてみるこ古着屋下りて
 松郎
 古着屋へ仲間らしいは上り込み
 同
 古着屋の目に立つこに長襦袢
 同
 まあお這入りこ古着屋裾をみる
 同
 うなされるのもありこな古着店
 路郎
 古着屋の軒を蝙蝠覗くなり
 同
 古着屋は昔のまゝの夫婦にて
 同
 古着屋はちよいとつまんでちよいと放り
 同
 笑顏 互 選
 さうかつて無理に笑はれまつかひ
 松郎
 迎へられて父も笑顔になつても
 二柳子
 店開きみんな笑顔で寫つて居
 飯山
 流行 妓笑顔の隙を見せじこす
 刀三
 笑顔こ向い合ひ重い氣持なり
 ひろし
 兒の笑顔見たさに亭主また泣
 柳蛙
 淋しさを笑顔に見せて窓を閉め
 しける
 社長牽出て來た笑顔取まかれ
 一路
 御寮人笑顔に皺が殖わてくる
 助六
 抱上げて目も鼻もない笑顔なり
 百雷
 取もも取れず笑顔になりきれず
 文錢

一寸笑顔さすだけに乳母汗を、

思惑の息子笑顔でよく動き

水呑んで笑顔を見せた二日酔

貫はれて来て笑顔の仲間入り

にこ／＼電話室から一人出る

姑の笑顔に嫁は軽う立ち

笑顔を見て待たされた身を忘れ

手を重ね笑顔になつてくれる父

まゝごこの笑顔は母になりすし

笑顔をは包み隠して魚行を打ち

にこ／＼飲む相談の輪へ這入

おやつさんが笑顔を見客が来

儲かつたらしい笑顔で久し振り

怒らせて置いて笑顔の芝居裏

女學生三人寄るききや／＼

笑つて叱られてゐる三枚目

麻戸あけてからの笑顔にいゝ話

その笑顔女房がまづ不思議がり

みな笑顔何が譯ありそな座敷

別嬪やないが笑顔ほめられる

諷伏を笑顔の女中云ひたがり

五十銭がまこの笑顔で歸へす也

雑

萬よし

祇梵

塊佛

かほる

静雲

獨眼坊

三次

文久

同

柳水

同

のほろ

同

山月

同

波郎

同

馬行

同

紋太

同

路郎

―相撲吟より採る―

満員の中にリボンの脊が高し

焼芋の親父湯氣から顔ミ手ミ

焼芋屋汗の浮出た錢を受け

綻びに大分長い糸が要り

ボナスを糸代にして編む氣

祭日も又待ほけの長襦袢

よろこびミかなしも賣る水引屋

流されて流れて昇る目高なり

はいよろしいミ齒醫者手を洗ひ

齒醫者まですき髪で来る未亡人

いゝ父になつて理窟を笑ふのみ

理窟づくめの中へ三味線しける

猫板の上で湯呑の底を見せ

酔さめの電氣を不思議さうに

消に残る星を遠足嬉しがり

日向ほこ柿はなか／＼落て来ず

男なら落籍してくれミ大きく出

幕張つたお寺ミお寺向ひ合ひ

お多福ミ云はれ其場は笑つミ

花持つた澎がはつきり寺の壁

蹴を肩に都戀しき唄になり

常連は手易く紙を貰ふなり

貧乏へしんみり判る酒の味

書の句會

十月十四日 晝

於北區寺町成正寺

大鹽中齋の墓がある北區寺町成正寺に

於て書の會を催しました、當日は馬行、

刀三、松郎が幹事ミなつて幾分例會ミは

變つた催しをと思つて十四字川柳、回覧

互選、互選最高點者二氏の選、其他の共

選等を試みるなミ秋晴れの一日を愉快に

作句致しました。尙當日の參會者は

乾坤、一路、飯山、柳水、悟郎、十字路、三平、
彩秋、放馬、ひろし、秀哉、悠々、万よし、月
兎、青影子、閑路、芦穠のぼろ、凡平、刀三、
馬行、松郎

見送り 互選

見送りを派手にしてゐるな中松郎
見送られ行く途にみる病犬 同
こゝにまた一かたまりの見送人 悠々

見送りの列を驛夫はしさらせる 同
 發車する笛に子供を窓へ出し 悟 郎
 分會長見送人にそつけなし 同
 送られた人の噂ではすむ道 乾 坤
 見送りの一人は動く汽車を降り 同
 見送りの同志 初對面の挨拶 放 馬
 見送りが互ひに荷物奪ひ合ひ 同
 見送りは汽船の凄泡をみる 秀 哉
 見送りの人はつかりの満員車 同
 見送りは火を埋めてから立上り 飯 山
 見送つた方は疊の上で寝る 同
 見送りの妻を無視したやうに 柳 水
 見送りに來て驛前を見違へる 同
 見送る今日の女將の身だしなみ 同
 吸殻を捨て、見送り歸るなり 十字路
 左様なら見送りはまだ立つても 同
 見送りの裾吹く風を寒く見る 同
 見送りの番頭バナ、の籠を提け ひろし
 ひみ隠は見送りの聲耳につき 同
 橋迄を見送る人へ通り雨 同
 見送つて又明日から働かう 刀 三
 見送りの後に残つた小鉢皿 同
 見送りは淋しきものよ竹の皮 同
 見送つて鬱陶しい部屋になり 同

見送りの隅に目立たぬ髻である 馬 行
 見送つてみんな無口のまゝ歩き 同
 見送りに心おほねの時間表 同
 見送つて踵返せば廣い道 同
 仲 人(十四字詩) 互 選
 年から先に話す 仲 人 三 平
 かつミ座敷へ通る 仲 人 悟 郎
 仲 人 をして男 一 正 万 よし
 羽織袴も 貸 して 仲 人 柳 水
 仲 人 をして家がもめてる 一 路
 日取りせまつて 仲 人 の 汗 聞 路
 新郎の眼に 仲 人 若 し 青 影 子
 萬事任せられ 醉 ふ た 仲 人 同
 仲 人 をして憎まれてる 放 馬
 無駄足ふんで 歸る 仲 人 同
 芝居の果てを 抜ける 仲 人 飯 山
 仲 人 だ け が 歸る 玄 關 同
 おまけに損をしてる 仲 人 悠 々
 様子見がてら 仲 人 が 來る 同
 堅うなる 肩 叩く 仲 人 秀 哉
 下駄を履きつて 仲 人 の 洒 落 同
 仲 人 にあふ父母のほゝ 笑み 同
 仲 人 の 手 に 百 匁 蠟 燭 十 字 路
 いそぐ 歸る 仲 人 の 顔 同

衣摺れの音 仲 人 の 聲 同
 仲 人 の 外 知 ら ぬ 耳 打 ち 月 兎
 眞面目臭つて 謠 ふ 仲 人 同
 宅へは寄らず 廻る 仲 人 同
 藝者の方は引受け 仲 人 刀 三
 仲 人 が 意 地 に な っ た 縁 談 同
 戀の神聖を知らぬ 仲 人 同
 お茶菓子ばかりたまる 仲 人 松 郎
 仲 人 夫 婦 去 ん で ぶ 漬 同
 仲 人 の 下 駄 母 が 揃 へる 同
 これで五度目さほこる 仲 人 同
 二人に早い 仲 人 の 足 馬 行
 おのれ忘れて惚れる 仲 人 同
 自分の年に氣づく 仲 人 同
 去んで女房にしよける 仲 人 同
 妹 互 選
 十二點、刀三、八點、青影子、十字路、乾坤、
 七點、万よし、月兎、馬行・ひろし、六點、柳
 水四點一路、秀哉、凡平、芦穂、悠々、三點
 以下畧
 六 點 句
 耳隠し内氣な姉を輕んずる 乾 坤
 妹はすまないやうに肥れて居る 青 影 子
 五 點 句

嫁ぐ日の妹兄の眼にもよし 万よし
妹が居て友達に固くなり 月兎

四 點 句

妹の財布に新らの五圓札 刀三

三 點 句

妹の甲斐くしさに冬の水 刀三

妹が立替ねておく松竹座 同

女關で姉の仕度をせきたてる 柳水

義妹ミ云ふ名を呪ふ血に悶へ 同

妹の方から嘘はばれて来る 凡平

くさゝれた頭妹振つてみる 馬行

忙しさへ妹心配もつてくる ひろし

妹のその無邪氣さに涙ぐみ 十字路

二 點 句

洋装で出る妹の軽い足 秀哉

妹の唱歌家中ひくくなり 同

妹の愚痴は淋しい母の事 十字路

除隊の日もう子を抱いた妹なり 万よし

妹の友の事なき聞いて見る 馬行

金貸てからは妹でない言葉 青影子

皆の留守妹のなやみきいてやる ひろし

妹におしめて腹の立つ英語 一路

一 點 句

妹の亭主をはめて母は去に ひろし
高髻に結ふて妹腹せてゐる 十字路
はかなさは妹のある夢をみる 松郎
妹をしり目にかけて嘘を云ひのほろ
妹の無理が通つた錦紗なり 彩秋

年賀廣告を募る

▼奮つて申込まれたし▲

▼一口金五拾錢(一頁の十
二分の一)

幾口でも申込んで下さい。一頁に
限り金五圓、一口分の原稿はなる
べく簡單にお願ひいたします。廣
告料金は前金のこゝ。

▼申込期限十二月五日迄(新年號
掲載)

大阪市港區八條通二丁目一一

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇

笑ひ乍ら妹の連れ兄の連れ 悠々
徳利の倒けた妹おかしがり 三平
妹の方はこしらへ先に出来 飯山
妹さんの事を妹尋ねられ 聞路
妹のあはて、隠す 流行 唄 悟郎

行 末(兼題)

刀三、馬行、松郎共選

刀

癖のある酒で行末案じられ 三平
行末を考へる日の亂れ髪 芦穂

馬

行末をきめて二人は明日を待ち 乾坤
行末を考へ白蒸の一味を取り 芦穂

行末は落籍でやるミ酔ふてゐる 青影子
埋れ火をはじくり乍ら末の事 悠々

考へる程行末に暗い事 放馬

行末々案じ乍ら嫁くミ決め 同

行末を安樂椅子で考へる 同

(地)行末に恩給ありはあるもの、 飯山

松

この場合行末きこの沙汰でなし 万よし

(佳)行末も思はずうまい酒 秀哉

(人)行末を頼む枕へ咳上ける 柳水

(地)行末を案じる父母の更け聲 秀哉

刀、松

行末はおんなじやうな尋常科 十字路

行末を吐出すやうに戀敵 徹底郎

行末はかまごの灰も俺のもの 聞路

刀、馬

振られた八公

英

豆

刀、馬(天)

勤めする身の行末を語り合ひ 乾坤
行末のこゝ迄知らぬ 紹介所 かほる

刀、地、松

行末は母が案じる程でなし 聞路

刀、天、松(佳)

行末にふみ氣がついた出前持 飯山

馬、松

行末の恐ろしい子を蔵に入れ ひろし

行末の爲に兎も角 預けられ 青影子

行末を案じる炬燵熱過ぎて 徹底郎

馬、松(佳)

行末を樂しみ乍ら針を持ち 一路

行末を堅く握らす 枕元 同

馬、松(天)

行末を考へる影壁に 伸び 柳水

刀、人馬、松(佳)

行末を話す仲居ミ地味に 酔ひ 悠々

行末を自分一人できめてゐる 馬行

恨みでもあいつは縁に行けへ 松郎

脚氣

十、青、影子、路、共、選

久振り戻れば脚氣病んで居り 凡平

白米を今日から喰べる脚氣なり 聞路
公園の丘で脚氣は 里心 芦穂
正月もこんなやうかうか脚氣のほる
忙しい中の氣兼ね 脚氣なり 同

青

そうです云ひ、脚氣食ふ松郎

店の隅脚氣が二人こぼして馬行

つまづいた石を脚氣は振返り 悠々

簾入りの様に歸つて來た脚氣のほる

テーブル、脚氣の足を垂れて秀哉

心配の道を脚氣は歩かされ 一路

脚氣もう麥飯にあき嫌にあき 同

十、青

風流にあらず脚氣は朝の露 万よし

脚氣だけ居残つてゐる木賃宿 月兎

國へ去ぬ心しきりの脚氣なり 馬行

いゝ氣分脚氣は一つ丘を越へ 悠々

志づけず脚氣は歸省する 芦穂

煮のきらぬ言葉で脚氣何か言ひ 刀三

日當りへ脚氣はまるい背を向け 同

靴下の上から脚氣明らかさま 秀哉

許嫁脚氣の足をみせられる 同

偵探と畫映



キネマ雜誌界の權威

探偵小説界の明星

【錢十三價定】

馬鹿な話だ柿が好き

ふぐになりたや

淡路のふぐに

馬鹿な話だ栗が好き

馬鹿な話だ支那栗が

パンニ
乳
紅茶
角砂糖

東魚氏の柳樽通釋異見の異見

木村 半文 錢

ほんおごり最うちつみのがおんぎ取

この句を武笠氏は「もうちつで女になる十三四歳の娘」に解釋され、東魚氏は「恐らく脛もあらはに踊つてゐる、もつちつで……パレがかつた句で繪畫的に面白い」を説かれてゐる。この句は、さう解してもいいのであらうか。

武笠氏の解の「もうちつ」が「手頃」になりかけた娘を解されたのは、盆踊そのものゝ淫蕩氣分からの先入見が餘程禍せられてゐるいではあるまいか。そして、十三四歳の娘が其の盆踊の「音頭取」であつたとは鳥渡首肯のできぬ點である。氏はまさか「音頭どり」を動詞に思はれたのではあるまいか……亦東魚氏の解は、私にまつて益々解らない。氏は脛もあらはに踊つてゐる、そしてパレ氣味ださせられるが、一體この盆踊は夜間ですか白晝ですか。夜間だ、餘程月光の明るい處かもしくは今日でいふ煌々たる電氣……その時分だから何をうひたか知れないが——でなければ、繪畫的に面白いといはれる肝腎の處が鳥渡人の眼に映らない事になる。餘程眼のよい人でない限り

……。そして東魚氏も「音頭取」これ自体に就ては何の解釋がない、或は踊つてゐる娘が音頭を取りと同じ様な動詞に見られたのかも知れない。兩氏の説かるゝ處でいゝのだらうか、私は疑はしい。そして私はこの句に對して左の解釋をもたうとする二つある。

(一) 盆踊りに際して音頭取が、粗雑な材木を渡したやぐらに上つて懸命に美音をはりあけてゐる、併し、足場は悪いし、夢中であり「もうちつで」落ちさうだ……つまり危険なところ立つて夢中に聲をはりあけてゐる「音頭取」そのものの叙景を見たい「落ちさうだ」の省略であらう。

(二) 盆踊りが初まつた、音頭取は、もうちつで現世お別れする村の年寄だといふ點を解し得られぬ事はない。この點は武笠氏と同じ傾向であるが、この句の解して對立した時は「音頭取」の解釋は老人とする方が正しいのではあるまいか。右二様に解され、殊に兩氏の説を合せた四つの異見がある。されが一番正しいかといふ事は私は云はない。ひたすらに兩氏の御示教を仰ぐこゝにする。因にこの句を「音頭取り」と動詞

にせられた場合は、餘りにも「益踊り」の「リ」を重なつてリズムが變である。同じ「リ」を「音頭取」ももつがこれには免れてゐる。

いたゞいてのむもくやしき山歸來

武笠氏は「亭主にうつされた梅毒」東魚氏は「人物を女房にするは不可ぬ、金をつかつた當人が、エ、いま／＼しい山歸來をいたゞいて飲む處に滑稽味がある」と説かれてゐる。無論武笠氏の説は疑はしい。そこで東魚氏の説のやうに解して、この句がほん／＼に作意を正しく解されてあるか何うか、それも私は疑はしいと思ふ。東魚氏は「いたゞいて吞む」を滑稽だに云はれるが、それでは次の「口惜しき」が餘りにも意味をなさないと思ふ。それでこれは私の獨斷かは知らないが、この句を斯う解したい。

金を費つて、さん／＼ばら放蕩した揚句、例の通り無一文に
なるし、山歸來の厄介にならねばならぬ様にもなつた、が藥を

▼ 蛭子省二氏より(朝鮮)

今日は天長節祝日、快晴、昨夜今朝の發熱が比較的輕かつたので一寸元氣を回復する。朝食、卵二個増汁二杯重湯一杯半、門の國旗を眺め日の丸の赤が心地よかつた。此病氣には沐浴は何よりなので正午久し振りに、腹部に、バンソウ膏が／＼貼つてあるは注射の痕跡、老人が目なしばなく。鬚を剃つてみようさ、かみそりを持つたが夫れ丈け

買ふ金もない。友人が親方が誰かの慈悲の袖に縋つて山歸來をのんだ、そこで初めて「いたゞいて」もいさるし「くやしき」も本人のころもちを現はしてゐると思ふ。でなければ兩氏の説では、言葉のもつ意味が判然として來ない。

尺八にむねのおさろくあら世帯

この句は、恐らくバレ句であらう、尺八は變態性慾を満足さす、一つの技巧である。(詳説できないのを遺憾としますが)そして、あら世帯のふたりが昨夜か一昨夜か……まね近い過去に行ふた、まころが門へ尺八の音が聞こへる、ハツミふたりは顔を見合して醜行に羞ぢるる状態……それを胸のおさろくさ皮肉つたものであらう。他に、この句ミビツタリ合致する史實の人物を發見せね限りは東魚氏の説も假想に過ぎまると思ふ以上三句だけ疑問をあけます。そして私は武笠氏の名著に敬意を表し、東魚氏の努力にも同じく敬意を表して擲筆します。

落ちづいた氣分さは未だなれぬ。

生來小男だから自分には、ソナナに瘦せたさと思はす徒に疲勞するには困る。机にむかつて呼吸を整へる。

郵便配達夫の黒眼鏡が光る、川柳雜誌「十一月號がある。

一句を遣しておかればならぬ

そうであつた、病苦の押し寄せて來る間に。

脊を叩く無口の妻に樂がさせ度し

解け難く名簿を續いて消しぬ

講習會のバンを慰みし日和

△ク鼻が曲つて病室にうつる

疊替に亭主 一分の埒をあげ

裏の庭をのぞいて見る也の水が濁れて黄

いカリンの實がいくつも落ちてゐる。藪は下た

葉が落ちて遠くがすけてみえる。朝鮮人の子

供の赤や紫の上着が動く、鶏が驚いたやうに

逃げてゆく。遙柿は眞赤になつて未だ幾百さ

なつて居る、淋しい晩秋だ、自分が病人だからでもあるまい。(路郎、二柳子宛)

玩具箱 省 二 生

(十二) 道 鏡 神

大阪朝日に載つてゐた、愛媛縣越智郡弓削村自性寺内にある、鏡塚を移轉する事になり。發掘したところ、塚内から三重になつた襷を發見し、調査するに人間の歯牙、金の佛像、水晶及び金で包まれた貝等が出た、古來同村に弓削道鏡の墓があると言ひ傳へられてゐて、此鏡塚は五十餘年前に弓削神社から移されたもので、當時は神罰があつたから、襷の中を覗かせなかつたものだ。弓削村の名や鏡塚の名からして、多分道鏡の墓ではあるまいか。考古學者に研究を依頼して居らる。道鏡の塚から出たがさまつたけ古川柳に咏まれた道鏡は、皆未番で「木摘花」等には例句が多過ぎて困るが遠慮させられる。

道鏡は一戒たもつ斗なり
道鏡は居呂呂柵の御宇に出る

道鏡も浮世は廣いもの云ひ
公家女等かやきをります道鏡
天皇馬を吞むこみて僧を得る

道鏡は河内の人、義淵僧正に師事して、如意輪法宿曜法を收め、孝謙天皇の寵遇をはいまにし、太政大臣禪師と爲り一門榮えた。宇佐八幡の神教の事ありし以後、下野藥師寺別當として三年貶所に死し、庶人の禮を以て葬られたとある。藥師寺村には道鏡塚が今尚は在る、肥後飽託郡藤田村弓削に道鏡神社、美作英田郡弓削村に弓削祠等全國到處に祭られ最も多きは常陸で數ふるに違なしである。道鏡神は道饗神と相通する所から性的神化して、下の病を治す衆人信仰のものに社祠宮殿も並び、道祖神と關聯して男根を祭つて道鏡、女陰を祭つて○○○なすに至つたのである、或處では神前にか

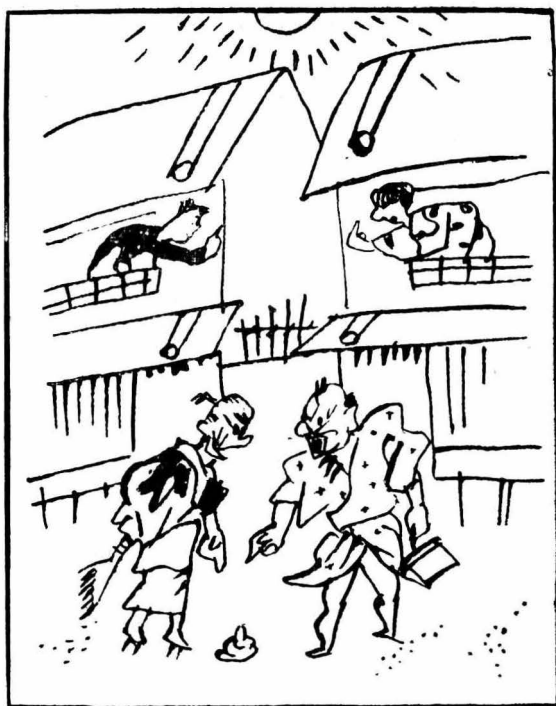
くる鈴の紐に六尺程のリングを網に入れて垂れたり、男根の彫を作つて捧ぐる數百に及ぶとか、又は村民伊勢に參宮の折りは妻女は必ず道鏡を祭る法王宮（伊豫國）に參籠して無事歸宅を祈るとか、惡疫流行に際し或は雨乞ひに際し、男根を以て表象せる道鏡を擔ぎ出すなどの風習も行はれてゐる。

本朝俗諺誌に「常陸國茨木郡高原、此所の畑の中一茂りの森あり、弓削道鏡の社あり、神體は石にて彫める長さ一尺四寸の男根なり、又一谷隔て、向ふの山陰に○○○皇の宮なり、其神體は石の女陰で長さ二尺、黑色の石の陰形なり、これを土民は女法皇男法皇と云ふ、緣遠き男女此兩社を祈るに不思議に其驗あり、嘗て或る無法者ありて之れ誠しからぬ神體なりとて、内陣より取出し力持にし投棄なごしけるに忽ち大熱を發して、種々の事を口走り其後下疳を病み、永く苦痛して死にたり」などある。

漫 戀慕悲話二題

(A)

吉田 きよし



出目
「アラ、アラ／＼……………」
「だらすぐ焼いて下さ、せら はりますよ」
「レターは論争中の眞つただ中へ……………」

出目子
「有難う、うまくなけて下さ
權一『シマツタ……………」

仲の悪い隣
さやしの權
六三お辰ば
いは今日も
又犬糞中心
に撤廢義務
論争中、そ
んな事には
お構ひなし
の二階では
權一『出目子
さん此のレ
ターは讀ん
だらすぐ焼いて下さ、せら はりますよ」
「レターは論争中の眞つただ中へ……………」

道鏡が天位を覬覦したとか、孝謙天皇との關係に就ては、吉田東伍久米邦武其他田口博士等史家の異論多く、殊に佛教關係者は力辯を入れて論難して居る事である。

(十四) 鬼神

鬼神に横道なしとか、斷つて行へば鬼神も之れを避くとか、人は常に口にする、抑も鬼神さは何のであるか、茲に少し展観してみら、中庸に鬼神之爲徳、其盛乎あり、又のまごころに質諸鬼神、而無疑、みある、自分は論語讀まずの論語知らずであるが、一寸卷を開く、饗遲督を問ふ子曰く、民の義を務め鬼神を敬して之れを遠ざく知み謂ふ可し矣とか、子曰く、禹、吾に間然するな無し矣、飲食を菲うして、孝を鬼神に致し云々、禹王の大徳を繰返して居らるゝ、尙ほ季路問事鬼神、子曰く、未能事人焉能事鬼、さ、此の鬼神とは祖宗五祀山川社稷の類を云ふにある。未だ此の外に鬼神

(B)

をま「勸十さんぢやおまへんか」
勸「ア、おまやんか！こは早や」をま「御きけんさん」



彼の時はおまへが十八俺は二十で忘れもしない今頃の寒い日だった。あの土橋迄逃けて来しつかまへられ、おまへは大阪へあづけられてそれきりだから……」
孫「おばあちゃん、そんな顔したらいや」

勸「おまへはんも随分變つたな幾つになる」
をま「それはおまはん其答こんな孫が出来たもの、あれから三十五年になるさかいな……」
勸「そをかな

の文字を表はさない所で説いて居らるる甚に多い。
目に見ぬ神靈さしては、よく天地を動かす鬼神を感じしむ言ふ、鬼神其依、軀靈協從（書經）或は、天且弗違而況於人乎、況於鬼神乎（易經）なごある、之れを死者の靈魂さしては、改生之魂曰神、改生之魂曰鬼（左傳）或は、聖人之精氣謂之神、賢知之精氣謂之鬼（禮記）佛教の書に因つて教へられるならば、鬼は六趣の一、神は八部の通稱、威あるを鬼さ云ひ、能あるを神さ云ふ、神威也、能令他畏其威也、神者能也、大力者能移山填海、小力者能隱顯變化（金光明經）或は鬼拜及神、云何差別、障身爲鬼、障心爲神、長阿含經には、佛告比丘、一切人民所居舍宅、皆有鬼神、無有空者、乃至凡諸鬼神、皆隨所依、即以爲名、依人名人、依村名村、乃至依河名河、佛告比丘、一切樹木極小如車軸者、皆有鬼神依止、無有空者、一切男子女八、初誕生時、皆有逐神、隨逐擁護、若其死時、彼守護鬼

募

集

句

小屋

吉本寛汀選

名を問へば非人小屋から何か言ひ 無心
 働いた丈を食はねばならぬ小屋 吐瀉樓
 竹光と朱鞘 蒲鉾小屋の前 突支坊
 鶏小屋の屋根蒸つてゐいゝ月夜 月兎
 踏切の雨は小屋から旗を出し 拔天
 裏小屋へ入るゝ泣きやませ 山月
 芝居小屋光秀が出て雨さなり 朝寢坊
 活劇の追手は小屋を見逃さず 一路
 假小屋のうつらゝ少し揺れ 逸錢
 非人小屋腹の空いたが出て歩き 里塔
 西瓜小屋今夜も無事な灯が點り 案山子
 水車小屋取残されたやうに暮れ 乾坤
 番小屋に一杯なる 高 斯 白 灣
 轉けかけた小屋へもやはり鍵 聞路
 犬小屋も附けて設計出来上り 夢坊
 小屋掛けのまゝお祭が雨になり 枝呂
 朔日に間に合ふやうに小屋掛 炭車
 工事小屋鐮の 音 鐮 の 音 白 蝶

被害者は小屋の横たふ教わられ 一 聲
 蒲公英の中に小屋への道があり 眠 聲
 小屋掛の舞臺の板が刎ね上り 濁 水
 看板を外して小屋は煤けたり 太 閣
 口笛を吹くこ犬小屋音がする 柳 秀
 復興もせず其時の小屋のまゝ 清 春
 今日の日陽が蒲鉾小屋に照る 来る のほろ
 親分の白服小屋に目立つなり 凡 平
 夏も過ぎ秋も過ぎ小屋黄昏れる 同
 アンテナに隣の小屋の屋根を借り 意 翠
 空小屋を一つ鮮人見つけたり 同
 迂回した事を炭焼小屋で 聞き 万よし
 殺し場の小屋だけがある舞臺也 同
 小屋の足場にくくらんだ幕 しける
 樂隊のマーチに小屋の廣いこ 同
 番小屋の今日居るらしい煙を 助 六
 旅役者昨夜と違ふ小屋で 寝る 同
 犬小屋をハミ出して犬欠伸する 幽 里

攝其精氣、其人則死、

謠曲には鬼・神がいくらかも出没する、然し

二種あつて凡そ讀み方を異にして居る、

例へば「東北」に「かるが故に天地を動

かし鬼・神を感じしむるこわざ」はキ

ンミ讀むが「田村」の終りに鬼・神ミ云ふ

文字が四ヶ所もあるが「いかに鬼神もた

しかにきつ昔りさるためしあり」は、キ

ジン・濁ら、換言すればキシンミ讀むは神

の扱ひの場合 キジンミ濁らは惡鬼の意

の場合である、これは面白い區別で、サ

ナミなごも清濁がある。

我が川柳には

大三十日うそで鬼神を感じしめ

西海へ鬼神をほうるいそがしさ

あいわつちや鬼神さな、遣手云ひ

ひき事で田村鬼神をはぢしめる

ごつゝ濁る側が多いやうだ

川柳書架 (二三)

誹風柳樽二篇通釋

(武笠山椒著)

本書は誹風柳樽通釋の第二篇である。

假小屋の事務所看板だけ目立ち

同

鶏小屋の屋根板みんぼそり返り

同

(佳)連立の小屋はいった二等卒

しける

(佳)此村が變る工事の小屋立

万よし

(佳)鮮人の小屋の雞魚寝を見通

助六

(佳)原籍地小屋一つあるだの事

同

(佳)鶏小屋の隅へこぼれ芽が伸

幽里

三 光

牡丹雪小屋へくさ吹きつける

十字路

大雨に小屋はほつミかれた姿

凡平

馬小屋へ戻れば矢張り繋かれる

一路

○

小屋一つ焼くスタジオの騒ぎ

寛江

肉シャツの女に寒い小屋の風

同

肌

塚崎松郎
橋本二柳子

共選

松 郎

選

出奔の床に寢肌の温みあり

仰天子

行水に夕顔のいろ肌のいろ

吐露樓

落籍れておなじ肌の温かみ

助六

許されて冷たい肌をあたゝめる

万よし

肌を吸ふ蚊が白粉の手につぶれ

月兎

諸肌をかくす兩手は脛を見せ

同

お守もちやんこついでる溺死体

憲翠

競つこして 肌の色艶

同

肌を入れ乍ら取りちこけたを詫

馬行

白い肌またくひまに掩はれて

同

我肌を抱いて力士は番を待ち

濁水

大漁の肌すれく船を漕ぎ

同

湯槽から肌いづばいの湯氣が伴

同

張り切つた肌へ襪しかこ締め

しける

光線へモデルの肌の無理もなく

同

肌につけて獨りのものと思居

同

肩のこり男まさりの肌をみせ

同

懷手出す振りをして肌をかき

放馬

絹蒲團うなされてる肌をみる

同

肌を手拭くやうにして塗つて

同

肌ざり木綿ぶさるも我家也

同

二 柳子選

同

兩肌をぬいであんまはもみほ

案山子

行水の肌へ夕顔の華がすれる

白蝶

肌脱いだ父はまだく呑む氣

憲翠

肌を入れながら雪駄を裸して

枝呂

肌脱いで飯食う事も世帯馴れ

凡平

此の肌をなさき誰妓は嘲られる

清春

肌見せるダンスに母は皺をよせ

三次

肌をさはられて金切り聲を出し

花泉

その巻頭に

▼一此の誹風柳欄二篇は、初篇のミ同様素人の素人解です。随つて、よりよいものにする爲に、讀んで下さる方々の御教示を切に御願ひ申上げることも、初篇についてミ同様です。

ミ非常に謙遜されてゐるが本書が柳界の至寶であることも且つ本欄で紹介した通りである。

▼大正十四年十月七日發行。四六版三五六頁。首句索引反注釋索引十四頁。定價金參圓。發行所は東京市神田區錦町一丁目十九番地有朋堂書店。

▼本書が川柳家にこつて益するこの多いこと著者が斯界の權威であること贅する迄もあるまい。

川柳家の戸籍調べ

○ 係 馬 行 生

(一)姓名 (二)雅號 (三)別號 (四)現住所

(五)生年月日 (六)職業 (七)好きな句 (八)

好きなタイプの人 (九)自信の句 (一〇)川

柳以外の趣味 (一一)配偶者の有無 (一二)

嫌ひなもの (一三)川柳に手を染めた年月

(14) 井上劍花坊

(一)井上幸一 (二)劍花坊 (三)秋劍、蓮花

庵、柴野瀧彦、高杉烟波兄、柳樽寺大和

尚(四)東京市市杉並區馬橋五四七(五)明

容見へ遠慮の入らぬ肌をぬぎ
今脱いだ許りですのミ肌を入れ
選舉から肌をゆるさぬ仲ミなり
肌ぬいだミこへ御免ミやつて來
美しくしい肌へ養ふ傷をつけ
湯槽から肌一杯の湯氣を伴れ
うすものに天華の肌がすき透り
藤八に負けて旦那は肌をぬぎ
あきらめた様にモデルは肌を
鏡臺へ若さを誇る肌を見せ
刺青の肌を母親怖く見る
肌脱いだミで母親今日も暮れ
鏡臺へ姉をしけのう肌を見せ
張り切つた肌へ輝しきミ締め

各地柳壇

▲市電の友川柳會

金風颯々として涼氣心地よき九月廿七日
夜築港託兒所樓上にて市電の友川柳會を
催す(啞人報)

鉢巻を取つてお見をせした言ふ
晝寝から醒めた鉢巻なまだるし

冷たい物にふれて 見た肌
づかミこあがる新類肌も脱ぎ
行水に夕顔の色 肌の色
湯に這入る時だけ肌分離して居
肌を吸ふ蚊が白粉の手につづれ
懷手出す振りをして肌をかき
肌ざはり木綿蒲團も我家なり
肌入れてやつミ化粧は立ち上り
大まかに人種を肌の色で分け
肌のよい女だったミだけ記憶
なめらかな肌へ朝の風が吹き
白い肌見せつけミいて惚させず
肌を入れ乍ら取りちらけたミ詫
お化粧の肌へ黄昏迫り 来る

松 郎 編

芝居の喧嘩鉢巻してから 始め
鉢巻を取るミ仲屋老けてゐる
鉢巻の女の寢顔細く 見え
歸省して父の鉢巻取らすなり
鉢巻で裾を拂ふは負けた方
合點ミ言ふ鉢巻はよくしまり
ちつぽけな鉢巻が出る舞さらへ

治三年六月三日(六)著述業(七)柳友の句
の中で數へたら少多擧げたいものもあるが
これからホントの革新が行はれた後には
まだミの好きな句が生れるだらうミ
思ふ、古川柳では「大水はうつわものに
はしたがはず」(八)この頃では川柳のわ
かる女なら、みんな女でも好きになれる
(九)これから革新がホントに行はれた曉
には、それが生れるだらうミ期待する
(一〇)讀書(一一)有(一二)嘘を云ふ川柳
家(一三)明治三十一年頃、即ち明治三
十六年新川柳興立の五六年前から。
(45) 矢田 右大臣
(一)矢田俊一(二)右大臣(川柳)を始めた
當時洒落てつけた名に今では閉口してゐ
ます。
拾貳年の春東京でお逢ひした、鈴ん坊氏
ミ劍花坊氏に雅號の御話しもしましたが
其時鈴さんが鈴の名にちなんで、朝鮮餅
を切るはさみを送つてくれミ言われた御
言葉に依つて改號を思ひミしました(ハ
はさみ)未だ御送りしてゐません)然し
雅號の由來なんて聞かれた場合は實際閉
口です。(三)冷刀。雨村(四)仁川府仲町
一丁目八番地(生れは神戸紋太さんの近
く)(五)明治三十年五月二十九日(六)
電話二つある商店の支配人(七)關西で生
れたせいか總体に關西の句、東京では新
星會の方々に好きな句を見出します

蟹

蟹の泡さながら煮えてゐる如し 光太樓
木綿糸蟹のお臍へ締り過ぎ 長人

尾行

寢臺で尾行をまいた髭を剃り ひろし
其の際に尾行煙草を買つて来る 刀三
見失ひかけて尾行は突當り 馬行
吊皮に尾行おんなじように搖れ 飯山

野球

馬鹿にしたやうに外野は腕を組ゝ 啞人
戀なんかなうにバット擔ぐ居 義矢満

遠足

遠足の朝の短氣は告知板 義矢満
遠足は地聊の店を見て通り 刀三
遠足の去年は兄の行つたミこ 松郎
遠足の一人買ふのにたんさ来る 光太樓

▲万よし川柳第十六回 杜若選

(天)法悦の中に嬉しい職を持ち 乾坤
(地)天職にたゞ貧しさのつきき 同
(人)仲屋の顔が利いてる裏長屋 炭車
裏長屋のさ安くミ生む話 乾坤
腹掛が續いて歸る裏長屋 聞路
裏長屋女給が一人目立つなり 憲翠
月給の事で天職暇を取り 炭車

天職を六十にしてまだ稼ぎ 凡平

▲同 (第十七回) 松郎選

(天)終ひ湯へ一人で來る嫁入前 秀哉
(地)お互ひに意地ほも椅子一つ 昇石
(人)三味線へ嫁入前を氣樂さう 飯田
刺繍一つく嫁入迫るなり 義矢満
下女程に動き嫁入近くなり 同
三越で母ミ疲れる 嫁入前 秀哉
腹いせをすゑる氣で立て椅子が倒る のほろ
嫁入前の心庭の木に 注ぎ 輝翠
落付いた意地は椅子を貸して 同
夕涼み隣りも椅子で罷り出で 憲翠
さて掛けてみて小姑の多い椅子 炭車
社長椅子頭ミ煙だけが 見ぬ 喜音坊
椅子の上へく立ち演説中止 万よし

▲万よし小集 十月十四日

衣桁

菊日和衣桁に軽い風があり 万よし
子澤山よくも衣桁のこけぬこミ 同
衣桁にもうつこしい日が續く居 二柳子
衣桁の裏にも一人の隠れん坊 同
衣桁から帯がきまくに迂り落ち 馬行
衣桁には常着が掛りみんな留守 同
恥しさ衣桁の影にじつさる 同

(八)深水畫の日本髪的女、東京で云ふ所謂ト町風の女(九)ない事もないが自分丈けの一人よがり、これから精々作るつもりです(一〇)旅行、撞球、芝居(但し歌舞伎)食道樂殊に旅行先で食べ歩く事が好き(一一)有ります(一二)始めて泊つた旅館の頭の高い女中、金を貸して呉れない人(一三)大正七年頃、劍花坊氏がはじめて朝鮮に來られた年。

(46) 森田輝翠

(一)森田光次(二)輝翠(三)松湖齋翠月(活花の號)(四)大阪市天王寺區生玉前町八〇(五)明治二十三年六月廿三日生(六)大阪市電氣局員(七)平凡の幸福豚へ話しかけ(八)路郎先生の句(九)落ち付きのある女(一〇)初心の私には自信の句がありません(一一)生花、茶、園芸(下手の癖に好きです)▼庭球、野球、見るのが好きです(一二)有(一三)他人の口の端に乗る凡ての行爲(一四)大正十二年二月。

(47) 柳瀬子行

(一)柳瀬勝次郎(二)子行(三)蛙聲庵、紅水(四)大阪市北區北梅田町四四五(五)明治二十八年六月十七日生(六)電氣七(七)宵寝して聞く九時十時十一時(八)水府、その他いろいろあれが略す(九)春のすたりミした日本髪、そして無口な女(九)自信の句只今持合せなし(一〇)遠足、讀書(一

神 棚

神棚へ頼んで父は旅にたち 二柳子
お燈明を明るく拜む旅戻り 同
神棚の掃除の中に飯が吹き 万よし
菊買ふて神棚を拭く氣にもなり 同
神棚がジ、ミ鳴つて誰もるす 馬行
神棚を遙か忙ししい臺所 同
夕餉からみる神棚に風があり 同
神棚の掃除舅へ任し 同

▲事務所偶會 十月十日夜

板 園

もう虫が鳴いてる古い板園 雅幽
板園のミこで亭主が待つてゐる 同
板園過るミ寒い風が吹き 二柳子
板園の方は通らぬ女連れ 同
奥行の深さが知れる板園 かほる
板園かんなを掛けた板も張り 同
板園の中で馬力の搖れる事 放馬
板園の外へ壁土落ちて 来る 同
板園覗くミたゞの廣場 なる 同
板園外へも見ゆる草の び ひろし
板園金一外のコート なり 同
板園されて勝手がちミ 違ひ 同
板園が續いた果の交番所 松郎

改めて見舞に來てる板園 同
板園まだ住んでゐる家をみる 同
板園自轉車の手をふれてみる 同

木 賃 宿

札所で逢ふたのも来る木賃宿 二柳子
野宿よりもまだミ思ふ木賃宿 同
木賃宿拾を著たはなまけ者 かほる
木賃宿赤新聞へ皆が寄り 同
木賃宿がらりミ晴れて誰も居ず 雅幽
水溜りさつち向いても木賃宿 同
木賃宿先生ハガキたのまれる ひろし
刑事來て顔を並べる木賃宿 同
出し合ふて葬ひをする木賃宿 同
木賃宿銅貨を數へ乍ら来る 放馬
勿体ない繪を壁に貼る木賃宿 同
木賃宿博士は壽計を買ひにやり 同
木賃宿コレラもくそもあるも 松郎
湯上りの氣分木賃に馴れ居り 同
新世界から鼻唄で去ぬ木賃宿 同
拾て來た鑑定に寄る木賃宿 同
▲來訪集 (北山悟郎報)

復 縁

復縁の間も無く男の子が生れ 悟郎
復縁が今日子を伴れて墓詣り 百石

(一)有(二)きらひなものなし、さりミ
て好きなものミてなし(三)大正六年七
月ある雑誌に投句したに始まる。

(48) 大 休 一 休

(一)大休甚造(二)一休(三)無し(四)神戸
市脇濱町三丁目四八ノ六(五)明治廿八年
四月廿三日生(六)電車乗務員(七)「淋し
さをみんなまこめて里へ行き」拾月號路
郎先生の句「これ程にしてもミ思ふ嫁の
胸」作者は忘れまじり。等たんミある中
でも淋しさを帶びた句が好き(八)好きな
女ミ來ては見逃しが出来ません背は高か
らず愛嬌があつておミなく女の道は何
ならぬ、先づ壯健で自己を超越せざる女
そして川柳の一つも作る女慾を云へは其
上優しい氣があつて欲しい(九)自信の句
一つも無し(一〇)魚釣りが好きでした
が川柳をやりにかけてから以來一度も行つた
事がありません、只今の所川柳以外に何
の趣味も持ちません(一一)お蔭で一人だ
け(一二)媚びへらひをする奴、義太夫、
蛸、生味憎等(一三)大正十三年春頃川柳
雑誌創刊號を手にしたが柳誌に眼を落し
た初め、それ迄に二三度新聞柳壇に投句
した事あり。

復縁の話へいつか白んで来同

復縁を決めてぐすり眠つてゐる十字路

復縁を勧める伯父へ涙の眼同

復縁の袂に赤い袴松郎

復縁へまだ姑の達者なり同

復縁にもう乳母でない顔を見せ同

洗ひ屋の附けへ復縁手を重ね刀三

復縁のもう白梅に手がのびる同

復縁の素足へ覺冷たすぎ同

罪の女

捕手共をせうら笑つて立つ女十字路

捨兒した時とは別な涙なり悟郎

出獄の母へ子供の見當らず同

襟脚へ刑事は暗い氣にもなり刀三

訊問へ女の智慧の淺間しき同

豚箱の亭主へ會はず顔もなし同

母さんが恐いかミ刑務所へ戻り同

丸髭で埃りの街を引かれ行く同

墮胎罪それは曇つた朝でした馬行

萬引の女手近の辻を折れ同

被告の聲が女の胸を刺し同

墮胎する迄に薄情一人あり同

法廷に立てば一際美しき同

▲女將ミ逢狀 ひろし報

十月四日吟行の

夜の越後町小集

逢狀を見て見ぬ顔をするつらさあい

頭字が似てゐるだけの逢狀なりひろし

逢狀へちつゝ氣まゝな眉をよせ馬行

逢狀へ降りて来てまた素見され松郎

逢狀へまたあの人がき思ひ刀三

女將

おかみさん今日はほんまにお茶お茶ひいて女將ミ話し寒う去ぬあい

チンチン銅壺かな女將居すひろし

しつかりおし女將に叩かれる同

案じつゝ女將お燭をまたつける同

女將からやんわり意見されて刀三

暇な日の女將白粉なさを塗り同

女將が見ても無理がない若旦那同

はあゝ女將返辭をしてる馬行

女將また庭の埃に眼がミツき同

まあゝ女將店まで立つて同

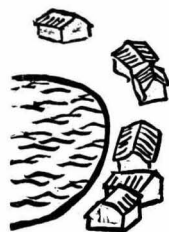
書行くミ甚平着ているおかみ同

圓助ミいふて女將は輪を吹かし松郎

落籍れる話に女將丸うなり同

(49) 庄 万よし

(一) 庄健 (二) 万よし (商號です未だ雅號を用ゆる程の自信なし) (四) 道頓堀新戎橋南詰角の店 (五) 憲法發布の祝典がこの世の最初の記憶です (六) 白鶴ミアサヒビールを賣る上かんや (七) 十三日までは大石笑はれる (剣花坊) (八) 男の持たぬ何等かの機智を持つ女は皆好き (九) 上かんや時には客に管を巻き (一〇) 野球 (全國中等學校大會は初回から欠かした事なし) 角力 (小さい体で宮角力を取つたこゝもある) 義太夫 (杜撰つけたこゝもある今は中止) 觀劇及劇評、園基 (今は中止) 玉突 (同上) 旅行 (暇あれば何日でも飽かず單獨でも團隊でもよし九州、中國、四國、東海中仙道は行つたが他は未だし) 酒 (日本酒は十年前までは一升でしたが今は半分、ビール洋酒は嫌ひ) 女 (徳川家康流) 歴史地理書を讀むこゝ、啄木、蘇峯、獨歩、綠雨、樗牛、日蓮なきて養はれました、政談演説 (此頃は昔はぎの熱なけれど中央公會堂へ野次りに行きます等々々) (一一) 有、銀婚式に七年程間がありますのに一年生の敏子一人だけの子供です (一二) 大正十三年九月。



川柳と生活

—— 纏まらぬ想も川柳だ ——

安 川 久 流 美

長い間川柳作句會へ長い顔を出さない。同好者から『不熱心だ』といふ聲を浴びせられてゐる。然し私としては事實左様に『川柳』を忘れてゐるのではない。川柳は私の唯一の生命であるから いつまでも遠ざからないのである。

せめて『一日一句』でも、仕事の傍ら句作しやうと焦慮つてゐるが……それすら、現在の自分の生活周囲を詠む、自信のある句が浮ばない、同時に句作で蕩擻く事さへあつた。

○ 始終各柳誌が問題にしてゐることはあるが、私は題詠なるものに作句者の束縛されてゐる事が氣の毒である。……題は

あつてもよい、しかしその題なるものを餘り見へぬない事である。

○ 題を遠ざかつて偽らぬ告白をナゼ川柳に纏めないのか——小刀細工や、化粧した句にはハツキリとした、噓が含まれてゐるから、實際イヤな氣持がする。

○ 生活それが即ち川柳である。妻を有つたら『妻』の句を作れ。妻が孕んだら、それを句にするがよい。子が生れたら……子が歩いたら、子が泣いたら、みな川柳になる。ひまじさを堪へて自分の生活を見つめなくちや眞の川柳は作れない。獨り者が女房の句を作つたり、女郎買せぬ者が『廻し部屋』の句を作ることはみんなウソである。

忘れ者箸茶碗の音を聞き

これは私の舊作である、この句を作つた時の忘れ者は即ち自分であつたのだ。自分を忘れ者にせねば忘れ者の句は作れないのだ。

牛乳を啖呑みして遅刻行き

斯う慌てゐるところが人間の眞實なのだ、この句は忘れ者でなかつた私の學生時代を連想させる。

○ 滑らかに川柳化する——いはばこゝな事は飽く迄贅意を表するけれ共、私は作り過ぎ——技巧の句は嫌ひである。想は確りに掴んだが、ごつしても、十七字には纏まらない事があらう。その『想』が立派な川柳ではないか——そして川柳めいた生活そのものも川柳の一端である。私の現在の生活が恰も引伸ばしの川柳である。だからその生活の裡から川柳詩を生む事に敢て不思議はない。

○ 生存競争のはけしい都會には生きた川柳が作られる晝三夜がはつきり區別される都會に作つた川柳にはいつも活氣横溢してゐる。

近作

麻生路郎

人形になつてゐるゝは嫁へ無理
尊くもけすにも見せる乳房にて
後家の相談こそばゆく聞く
風邪引ひて一輪挿にさゝれたり
二圓貸せ一圓貸せが續くなり
帆が霞むほきに借金忘れて居
月給の足りないこゝは忘れやう
炭斗へ突込む癖を見通さず
轉け込んで行けば女は疑ぐられ
色硝子の向ふであつたここのやう

川柳塔

○ 林田馬行

あくる日は理性ばかりの人のやう
 兩の手はボケツに夜の砂利が鳴る
 自叙傳の美少年さは虫がよし
 處女らしく昔想ふた人に逢ひ
 女店員のほかに三人鬚首に成り
 鐵ぶちの奥の冷たき眼を怖れ
 嫁の手に昨日の埃り今日の靴
 弱かつたあたしを責めて呉れさ云ひ
 蒲團動かぬまゝの最期さなりにけり
 眼ミ耳の働きすぎる枕にて
 父母の話氣になるまゝの十八九
 主義立てゝその主義に安んずる顔よ
 灯の下で動かぬ影は母ミ嫁
 享樂もいゝがお金が続くかい
 お前にももう云ふてよい頃ミ父
 一粒のその米からも白い水

○ 吉川 啞人
 初對面きつちもいけて面白し

歸郷して

友の顔みな古ほけたやうに見え
 歸郷してつまづきそうに家へ入り
 苦勞性經濟的な土産なり

○ 德田 双柳

ひき離す積り娘は預けられ
 一齊に扇を使ふ幕になり
 立ち入つたばかりにこんな破目になり
 やき持ちの待つてゐるさは子に負はし
 かけおちた先で女の良い度胸

○ 庄万 よし

畫風呂に一癖のある二三人
 支那そばや戯談でない笛を吹き
 此外に生きる道なし 鰻割
 炭坑に居たのを聞いて貸してやり
 思ひ切り泣くこゝなきか巻煙草
 おちよほもう一人前に念を押し

○ 黒木 葵豆

われ一人みる白菊がつめたくて
 負けぬ氣の男はやせるばかりなり
 柿の實もさびしく栗の實も哀れ

仲なほり出来るおかしさおもしろさ
言ひ譯けの女は無駄な糸をつぎ
草をむしつては流し心をむしつては流し
冷靜な表情をする金を持ち
その家で猫は上前はねてゐる

○ 高橋かほる

拜んではくれぬ露臺のいなりさん
紙で手を拭く髪結終ひなり
馬方の面長なのも面白ろく
がんぎうの様に湯呑は伏せられる

○ 高見柳骨

兵營生活

ラツバからラツバの間せかされる
打ちあける事も出来ない初年兵
垣一つ隔てゝ浮世遠くみる

○ 岩崎柳路

ネクタイを歪がめ徹底的に酔ひ
細帯の儘書留に判を押し
あんなおつちよこちよいとおかみはけなす也
流行を追はず産婆の試験すみ
かぶりつき臺詞以外の事を聞き

○ 關本雅幽

御利益へ大きくうつる過去の罪

隅へ物突込む癖を先づなほせ
もう戀の疲れが出だか湯覺めして
身の程を知つて女は遠慮する

○ 塚崎松郎

居續けに帆上げた船が見ゆるぞね
秋の夜はながいものはゲーム取
月給日あふてうれしき酒きけん
松ヶ鼻川風寒く朝歸り
落籍してもまださけかぬる薄氷
一の谷から二の谷越へて遊興税
首尾をようして逢ひに來たのに入院
電話口影に誰やら居るわいな

○ 橋本二柳子

石垣の中は靜に暮してゐる
待たされて欠伸を一つ見せておき
考へぬ事もないがさ敗けてゐるす
合鍵を持つて給仕はあきませぬ
みんな死ねばよいなあと思ふ日もあり
心懸け一つで大臣にもなれる
明日の日を祝ふてみんな酔てゐる
流れてゐる水にも自由がないもの
現金を握り我が家へ急ぐなり



編輯後記

▲短歌や俳句が社會から認められてゐるのに川柳がそれ等と同じやうに認められぬ筈がない。現代の社會は寧ろ短歌や俳句よりもつと川柳を認めればならない状態にある。然るに事實は矢張り從來の如くである。川柳に禮讃してゐる私にまつてこれ程遺憾なことはない。私が川柳宣傳に努力するに至つたのはそれがためである。

▲從來の川柳が社會から認められないのは從來の川柳家が川柳を弄びすぎてゐたからである。その罪は社會に無くて川柳家にあつたのである。私はさうした川柳家から遁れて

眞面目に川柳を研究し、生活に即した川柳に生きんとする人々のために指導することゝなつた。

▲幸ひに此の企てに對して川柳雜誌社の同人は非常な犠牲を拂つてくれた。寄稿家は筆の偉力で誌上を飾つた。讀者はこれが愛讀を惜しまなかつた。斯くして私の主張は日に月

◇忘年會◇

日時 十二月十九日午後六時

場所 大阪市南区清水町停留所西入

端の坊

兼題 「掛取」三句 路郎選

會費 金貳拾錢

句會に出席したことのない人でも遠慮なくいらつして下さい(幹事)

に大きく伸びて行つた。「川柳雜誌」の今日あるは決して偶然ではない。

▲しかし未だ／＼前途は遠いのである。私としては／＼内容の充實を計るために腐心しなければならぬ。

▲新年號は五割増頁して四十八頁とする。どんなものが出來あがるか。

二月號からは從來の三十二頁 本位を八頁増頁して四十頁本位とする。しかし増頁のため

に決して定價は上げない。この點から見ても本誌が何處までも讀者各位のものであることを知つていただきたい。

▲本誌は、吉田きよし畫伯から漫畫「燃墓悲話」が來た。味つて下さい。

▲十一月八日句ひに關する 展覽會の主催で本社後援の下に句ひに關する 川柳會が船場ビルディングで開かれた。句報は次號に譲る

▲同人吉川啞人君十一月に 郷里山口縣久賀町へ歸省數日を経て歸阪。

▲三好幸郎氏は「映畫と探偵」を創刊した。發展を祈る。柳壇は松郎君と私が擔當。發行所は大阪市東區農人橋二丁目映畫と探偵社(三十錢)

▲前號の「川柳書架」は落穂に付本號に掲ぐ

▲十一月十六日名古屋の 森田森の家氏來社

一泊。川柳の將來について語る。

▲本號は二柳子と松郎と私で編輯した(路郎生)

轉居

▲同人森田輝翠君は大阪市 天王寺區生玉前町八〇へ移轉

▲同人關本雅國君は 大阪市港區鶴町三丁目百十番地第一區六十六號へ 移轉同時に第四支部も移つた譯。

▲高須啞三味氏は 東京市芝區 南佐久間町一丁目一番地へ移轉。

▲酒井枝呂君は 大阪府 豐能郡麻田村螢ヶ池仙厓莊へ移轉。

▲道頓堀川にかゝつた日本橋

を南へ渡つて牛丁も行かないところにある古本屋です。主人公藤堂氏は愉快なおちさんです。とても古本屋のおちさんとしては珍らしい人です。

▲古本を漁りながらいろんな話をしてあげば道頓堀を歩いて来た感じが流れるやうに出て來ます。

▲こゝの特色としては、どんな本でも蒐めてあること、値段のところはまかしておいても安心して買へること云ふこと買ふさか買はぬさか云ふことを問題にせず愉快に本を見られるさうなことです。

▲せいぜい主人公とお馴染になつて下さい。探して貰ひたい本があれば頼んでおきさへすれば出來るだけ便宜を與へて貰へます(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

水了軒のお辨當

旅に行…集會に

山をほめ海をたゝへてお辨當



大阪梅田驛前
水了軒

電話
（北北）
一六八四三〇
四番番

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記するこゝ。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記するこゝ。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこゝ。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこゝ。

募集

第三卷第二號課題

十二月十日締切
(各題二十句以内)

大根 篠原春雨選
手袋 矢田右大臣選
海軍 井上刀三共選
高橋かはる

第三卷第三號課題

一月十日締切
(各題二十句以内)

人妻 岸本水府選
蜜柑 竹田蘆穂選
村長 關本雅幽共選
西垣松雨

每號募集

▼近作柳柳(五十句以内) 麻生路郎選
▼各地柳壇(會報) 編輯局選
▼文章(評論研究吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所に願ひます

價定

一部 參拾錢
六部 壹圓六拾錢
十二部 參圓(共稅郵)

料告廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十四年十一月廿日印刷
大正十四年十二月一日發行
第二卷第十二號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地
發行所 川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十一番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番

店書捌賣
(大阪) 明文堂 公立社 柳屋
(東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田
(金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石森

よろこびにそへて白鶴届けとき
 榮轉の今日も白鶴呑み續け
 白鶴がいつものバーへ運はせる

清 酒



灘 津 攝

嘉 納 合 名 會 社 釀

大正十三年三月三日第三回酒類稅務司(年月一日開行)
 大正十四年十一月二十日印刷 大正十四年十二月一日發行

第二卷 第十一號 (第二十三號)

定價金參拾錢